

一、大学人としてともに生きて

武田学園長のご厚情を偲んで

西 本 静 磨

武田ミキ学長先生のお話を親しく伺うことができるようになったのは、部長として学生の就職指導を担当するようになってからである。就職状況を報告するために、学長室を尋ねた。学長先生は、部屋の暖房をさかせ、厚着をして仕事をしておられた。風邪をひいておられたのである。「ご無理をなさいませんように」と申し上げたが、「ご

の原稿は明日学生に渡さないといけないから。」と一向に聞いて戴けそうもなかった。自らの身を厳しく律し、学生の教育に当たっておられる姿を垣間みたような気がした。帰宅時に見上げた学長室には、まだ、電燈がついていた。

ある時、就職課を強化しないと、他大学に遅れをとってしまうのではないかと感じた私は、就職課の定員増をお願いする目的で学長先生にお会いした。なぜ就職課の強化が必要かという点を色々説明申し上げたが、何時の間にか、学生の就職活動などの方に話が移ったりして、定員増の方に話をもっていけない。暖簾レシに腕押ししているような感じがあった。学長先生の腹の中には何かがある。それが分からない間は、いくら定員増をお願いしても無理だと感じた私は、話を打ち切り、惨めな気分です長室を辞した。学長先生の最後の大事な仕事となった教育棟の建築が始まった時、学長先生にとって就職課の定員増を予算的に考慮する余裕はなかったのではないか、駄目だと断って私を傷つけることがないよう話題を変えられたのではないか、学長先生の方が一枚も二枚も上手であったと感じたことである。

教育棟が完成した時、私は癌の告知を受け入院した。学長先生が病院へ見舞に来て下さった時、私は手術後の骨の激痛に耐えきれず鎮痛剤の投与を受けていた。その薬は体に合わなかったのか、気分が悪く、頭の中はもやがかかっているように意識がもうろうとしていた。学長先生から「この梅干は特別な方法で作ったもので、体力回復には効果があるから食してみてください。」とお見舞に壺入りの梅干しを戴いたことと、お帰りになる間に「早くよくなって、大学に戻って来てほしい。」と私の手を強く握って励まして下さったことだけが頭の片隅にかすかな記憶として残っているに過ぎなかった。体調がかなり回復した時、「学長先生は若い頃、カリエスを煩った時の苦惱

一、大学人としてともに生きて

を話しながら、あなたを励ましてくださった。学長先生ほど病人の気持が分かっておられる人はおられないんじゃないか。」と家内は学長先生が来られた時の状況を話してくれた。頂いた梅干は酸味が薄く、皮や実は市販のものと比べてものすごく軟らかだった。何年もの間、寝かされていたに違いない。紫蘇は添加してなかった。学長先生が何時までもお元気でいらつしやるのは、この梅干を愛用されているためではないかと思うにつけ、学長先生のご厚情に対し、何と謝してよいのやら分からない。

私は退院後、再び非常勤講師として勤めるようになった。学長先生は何時も私の体を気付かって下さった。或る時、タクシーで来ますから、体の方は大丈夫ですとお答えしたら、びつくりしたような顔をされ、「それじゃ、何のために大学に来ておられるのか分からないじゃないですか。」と言われた。お答えする前に、私は学長先生が若者以上に数に敏感であるのに驚かされていた。

告別式の翌朝、家内は、学長先生から戴いた梅干の入っていた壺を冷蔵庫の中から取り出し、「何か思い出すことはないか。」と私の前に置いた。家内は民陶調の色合が気に入り大事にしていたのである。この壺が、何度か学長先生にお会いしたことがある家内にとっても、また、私にとっても、故前学長先生の思い出となる共通の遺品になろうとは思ひも思ひもなかった。何時までも大事に愛用したいと思っている。

最後となりましたが、故前学長先生のご厚情を謝し、ご冥福を心からお祈り致します。